



韓国水景観の伝統的象徴とその知識体系

著者	崔 元碩
雑誌名	文化交渉による変容の諸相
ページ	123-147
発行年	2010-03-31
その他のタイトル	Traditional Symbol and Knowledge System of Water landscape in Korea
URL	http://hdl.handle.net/10112/3351

韓国水景観の伝統的象徴とその知識体系

崔 元 碩¹⁾

(翻訳：篠原啓方)

Traditional Symbol and Knowledge System of Water landscape in Korea

CHOI Won-Seok

This paper researches on the traditional symbol & knowledge system of the water landscape 水景観 and its historical transformation in Korea. It could be summarized four aspects: 1.) In the aspect of the elements, 2.) In the aspect of the transformation of contents, 3.) In the aspect of the Korean characters, 4.) In the aspect of the functional meaning.

Keywords: Korea 韓国、waterlandscape 水景観、symbol 象徴、
knowledge system、知識体系、cultural ecology 文化生態学

はじめに

本稿は、伝統時代の韓国における水景観の象徴と知識体系、そしてその変遷・変容について、文化生態学的見地から考察したものである。韓国における伝統的な水景観の象徴や知識体系を代表する要素とは何か、その属性・機能とはどのようなものか、そしてそれらが歴史的に文化交渉の過程をたどりつつ、概念、形式、内容、意味がいかに変容・発展したのか、な

1) 慶尚大学校研究教授 (Research Professor, Gyeongsang National University)
(wschoe@empal.com)

どを考察し、さらに韓国における水景観の特徴について言及する。

文化生態とは、ある文化集団に固有の文化属性と、その自然環境との相互作用との関係を指し、両者のつながりは、様々なアプローチからその説明・説明が試みられている²⁾。このような視座とアプローチから、韓国人の水に対する文化的認識や態度がいかに水景観に反映され、互いに作用したのか、そしてその象徴・知識体系の背景が何であるのかを考察するものである。

韓国の文化生態景観は、自然環境に適応し、生活してきた人々の歴史が投影されたものであり、人と自然との相互作用、共進の産物である。それらは韓国人の自然観や自然への態度にとどまらず、伝統建築の景観的立地、場所の選定にも影響を及ぼし、自然景観を変化させることで文化生態的な景観化をなす要因となった。また固有の象徴・知識体系が、中国伝来の象徴・知識体系と交渉しつつ、変容が誘発されることもあった。

東アジアにおける伝統的水景観の文化生態的象徴・知識体系とは、非常に広範かつ多様であった。それらは季節風地帯という同地域の気候、農耕という生産様式、そして定住社会の背景条件の下で形成されてきた。その中でも、自然環境とのつながりとして重要な役割を果たした思想に、自然信仰と神話、陰陽五行、風水、儒学がある。これらは自然信仰・神話における水神、五行における水、風水の得水、儒学における道徳・経世としての水など、それぞれのスペクトラムを通じ、文化生態的象徴と知識概念を形成してきた。各地において個別に形成される自然信仰を除くと、残りの要素は中国からの伝播、受容の産物であり、これらは在地の伝統と交渉しつつ、その地の自然環境・社会・文化にふさわしいものへと変容していった。伝統時代の韓国人は、中国からもたらされた思想を韓国の自然風土や社会・文化に合わせ、主体的に受容させ、それらの諸要素を複合的に運用

2) 尹弘基「行舟形風水局面の文化生態に対する試論」(『Pungsu: Korean Geomancy in Cultural Ecology』、英文版風水単行本ワークショップ資料集、2009年) 36頁

してきた（図1）。

伝統時代における韓国人の自然環境に対する認識や態度は、崇拜と畏敬（自然信仰）、調和と均衡（風水説と陰陽五行説）、道徳的換喩と審美的合一（性理学の思想）、利用や管理の対象（儒学の実学思想）など、様々である。これらは水景観の認識と実践にも反映している。

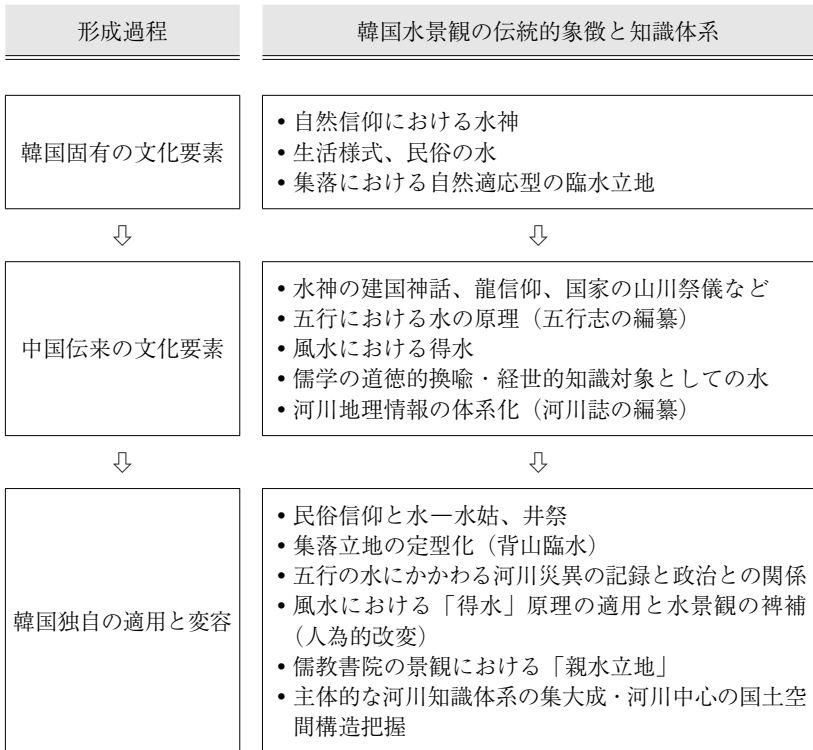


図1 伝統時代における韓国水景観の文化生態的象徴と知識体系の要素および変容

一 自然信仰と神話の水神

自然信仰と神話は、文化生態の象徴や知識の概念の中で最も原形的かつ

根本的なものであり、それらは伝統社会における自然認識と実践の枠組を形成してきた。特に水と水景観にかかわる信仰・神話、祭儀は、水がもつ本源的な価値すなわち生命への畏敬、そして水資源の社会的価値に対する尊重が、具現したものであった。その結果、水は伝統社会において絶対的価値をもつ存在として認識され、水資源の毀損の防止・保全に貢献したと評価することができる。

水や水景観にかかわる信仰・神話は、東アジアだけでなく、世界各地において普遍的に存在する。これらは文化進化論における自然発生的要素や、文化伝播論における外来要素という2種があり、また両者が習合・変容したのもあろう。文化の交流が盛んになる以前は、それぞれの地で自然信仰や神話が形成・伝承され、そこに外来文化が伝播することによって変容が起こった。

一方、孤立した地域などでは、外部に影響されることなく原形が固守されるケースもある。水と水景観にかかわる韓国固有の自然信仰・神話・儀礼要素には、巫俗信仰と民俗的な生活様式があり、中国的要素としては龍信仰、水神による建国神話、山川の国家祭儀などがある。この固有と外来という2つの要素が、歴史の中で複合的に展開してきたのである。

韓国において、自然信仰の象徴とその知識体系の原形をなす思潮に、古代の巫教と俗信としての巫俗がある。韓国の巫俗神話において、水は「天地の開闢」と共に生まれ、陰陽が調和して開闢をなす存在として表現されている。次の済州道の巫歌は、中国の天地開闢神話や陰陽思想など、複合的要素で構成されている。

太初以前、天と地は混沌として両者の分かれ目が明確ではなかったが、やがて天と地が分かれ、天からは朝露が降り、大地からは水露があらわれ、陰陽が合わさり開闢が始まった³⁾。

韓国を含め、東アジアにおける水と水景観に関する自然信仰・神話が集

3) 金泰坤『韓国の巫俗神話』（集文堂、1985年）13-15頁

約されたキーワードに、水神と龍信仰がある。龍信仰は水神観念が具象化したものといえよう。

伝統時代の韓国において、水神は水景観によって海神（龍王神）・河川神・澆神などに区別された。水神は建国の王や始祖として神話的に語られ、水神の国家祭儀が体系的に行われた。民間においては、水信仰が老婆（水姑）として擬人化した例もある。水姑は、外敵を追い払う地域の守護神でもあり、薬水信仰とも結びついて庶民に崇敬された⁴⁾。水姑は、山姑とともに、韓国の老姑信仰を形成している。

中国や韓国には、水をつかさどる人物や水神による建国神話がある。中国の黄帝、蚩尤、禹、韓国における桓雄神話がそれである。一方韓国においては、『三国遺事』の古朝鮮建国神話に「桓雄が風伯、雨師、雲師を率い、穀物、寿命、疾病、刑罰、善悪など人の360余事をつかさどり、教化した⁵⁾とある。桓雄が風伯、雨師、雲師を率いたという内容は、水にかかわる自然界を統率する機能の象徴である。新羅においては、治水の道具として万波息笛というものがあった。新羅の神文王代（681-692）に「万波息笛」を吹くと「干ばつの時には雨が降り、雨の時は晴れて風がやみ、波が穏やかになった」という⁶⁾。

水のもつ始原や生命の観念は、水（水景観）から生まれた始祖の神話としても登場する。新羅の始祖王赫居世は「蘿井」から、その夫人閼英は「閼英井」から生まれ、東扶余の金蛙王も、池の中から見つかった。また氏族の説話にも、水辺で始祖が生まれるという神異談が伝わる。中国や韓国の古代神話は、内容においてもつながりがある。高句麗を建国した朱蒙の母である柳花は、水神河伯の娘であった。この河伯は、黄河の水神であり、

4) 「薬水信仰」によって井戸が信仰の対象となった例には、広明寺井・君艾井・陽陵井・開城大井などがある。

5) 『三国遺事』 卷1・奇異・古朝鮮

6) 『三国遺事』 卷1・紀異・万波息笛

中国の江神において最も強力な神である⁷⁾。

一方、朝鮮時代の自然村では、共同で使用される井戸のある場所において「井祭」と呼ばれる井戸の祭祀が、特定の日に村落を単位として行われた。井戸の祭祀は、村民の生存に欠かせない水資源（飲み水）の環境に対する象徴的な価値を高めることにより、井戸の清浄さを保ち、持続的な環境保全を確保するためのものであった。

韓国では、水にかかわる国家祭儀も古くから行われてきた。三国時代における山川祭は、水災を防ぐための性格・機能をもった祭儀であった。『三国史記』によると、新羅においては「三山・五岳」以下、名山大川を区分し、大・中・小祀を行っていた。このうち中祀が、四海（東海・西海・南海・北海）と四江（東の土只河、南の黄山河、西の熊川河、北の漢山河）に対し行われたという⁸⁾。このような国家の山川祭儀に対する体系化と位階化は、水に対する自然信仰が古代国家の段階へと発展するにつれ、国土の水景観に対する地政学的・地理的な認識が発展したことを反映している。韓国の伝統的山川祭儀の根底には、固有の山川信仰がある。国家の山川祭儀は、中国の影響を受けているが、新羅において大祀の行われた場所が三山（3つの山）であるのは、韓国における「三」という数の象徴性が背景にある⁹⁾。その半面、五嶽の「五」という数字は中国の五行説に深くかかわっており、中国的な山川祭儀に影響を受けたものと思われる。

韓国や中国、そして日本には、水に対する自然信仰が具象化・象徴化した特殊な形態として、龍に対する普遍的な文化生態的認識があるが、韓国においては独自の要素も存在する。東アジアにおける龍は、水神という点で共通しており、雨や豊漁を祈願する対象として信仰されてきた。韓国語

7) 田英淑「韓国と中国の創世および建国神話の中に宿る水崇拜観念」（『韓中人文科学研究』24、2008年）265-266頁

8) 『三国史記』巻32・雑誌1

9) 飛鳥時代における藤原京においても、王京の背後と左右に「三山」的な配置が見られる。古代韓国と日本の三山の観念についても、今後研究が必要であろう。

には龍に対する固有の名称（ミル）があり、固有の象徴が存在したが、龍信仰の定着には、中国の龍思想の影響が大きい。また韓国においては、龍信仰が山岳信仰や風水信仰と結びついた。山を龍に見立てて龍山として景観化し、山と龍が一体化する現象も特徴的である。これを反映するように、韓国には「龍」の名のついた山（龍山、龍門山、盤龍山、瑞龍山、龍頭山など）が、河川の周囲に多く存在している（図2）。龍神が山（龍山）という場所に定着するのは、水神としての龍に対する従来の自然信仰が文化生態的に景観化し、定着したものである。中国における龍山の地名もまた、龍神を崇拝した場所と考えられる。龍信仰は、日本においても全国的に存在している。日本において龍神は、祈雨祭の対象として崇拝されていた。龍山の地名の一例としては龍王山があり、この地は祈雨祭が行われる聖地であった¹⁰⁾。

二 五行の水

五行思想は、自然万物の相互補完的な調和、そして秩序の象徴や知識体系を含んでおり、韓国・中国・日本人の自然認識と実践、自然と人間の相互関係が投影された文化生態的要素として重要である。五行思想は、東アジア的な自然景観理解の枠組のひとつであり、文化と自然の関係・変遷を捉えるアプローチのひとつとして意味がある。

中国で確立した五行思想は、韓国に受容され、伝統時代における自然観を構成する重要な要素となった。特に五行（水・木・火・土・金）の一番目にあたる「水」に対する原理的で相関的な思惟体系は、伝統時代における水景観の適用と象徴・知識体系の形成に多大な影響を与えた。高麗時代には、五行の原理によって方位（北）と色（黒）、形態（曲）などが従来の

10) 永留久恵「東アジアの龍神信仰について」（『東北アジア文化学会国際学術大会発表資料集』、2001年）138頁



図2 韓国の龍山系山分布図
(大東輿地全図 [19世紀後半] をもとに作成)

「水」観念に加えられ、国土・地勢の方向や象徴的色彩、山の形態などが関連づけられ、解釈されるようになった。

五行説が韓半島にもたらされたのは紀元前1世紀前後と考えられ、三国時代、高麗時代をへて政治、制度、天文、暦法、地理などの各方面に適用され、水景観の認識と適用、国土地形地勢の理解にも、多くの影響を及ぼ

した¹¹⁾。韓国においては、五行説の受容以前から、経験や知識の伝承によって培われた水景観が存在していたが、五行論によって「水」観念が体系化されると、水の属性に対する哲学的・原理的認識が深まり、概念が拡大し、人事（人間にかかわること）と相関的・相互作用的な知識体系へと発展していった。

高麗時代には、史書の編纂という中国的な伝統にもとづき、五行志が編纂された。高麗の朝廷は、自然の奇異な現象を五行の順に記録し、これらを君主の徳や政治に結びつけた。『高麗史』五行志の「水」のくだりには、高麗光宗12年（964）から毅宗5年（1151）にかけての水に関する災異が記載され、その序文には、五行における水の属性にもとづいた災異の背景と現象に関する認識と相関関係が表現されている。

五行の第一は水である。その本性は湿潤で、流れることにある。水はその本性を失うと、災いとなる。雨水が突然、大きな流れとなって押し寄せ、あらゆる河川が氾濫し、都や農村を破壊し、人々は水に呑み込まれ、雷や稲妻、雪や霜、ひょうが降りそそぐ。これらの現象は、水が本性のままに流れることができなかつたため起こるのである。その性質は常に冷たく、その色は黒い¹²⁾。

高麗時代の特徴のひとつに、地形・地勢を五行的思惟によって理解し、風土への適応を追求した点がある。次の資料によると、韓半島の地形・地勢は、五行の水（北の白頭山）を始原とし、五行の木（東方の白頭大幹＝山脈）によって構成されているため、文化や風俗は、これに相応しなくてはならない、という。

我が国は、白頭山に始まり、智異山に終わる。その地勢は、水を根と

11) 三国は建国の初期から、政治、制度、兵法、天文、暦法、地理、医学、墓制など、各方面において五行説を活用していた。『日本書紀』によると、百済には卜書と暦本を担当する易博士と暦博士という、五行説の専門家がいたことが分かる。高麗や朝鮮時代における日官や地理官（風水）は、五行を適用して運用する専門家であった。

12) 『高麗史』巻53・志7・五行1

し、木を幹としている。それゆえ黒を父母とし、青を体とするのである。風俗は、風土に順ずれば昌盛し、逆らえば災いとなるだろう¹³⁾。

高麗時代中期には、図讖術士の金謂碑が、五行説を山地景観に適用し、遷都を主張した。金謂碑は1099年ごろ、開城から南京（現ソウル）への遷都を主張したが、これは南京の山の地形が五徳（水・火・木・金・土）をあまねく備えているという理由からであった¹⁴⁾。当時の社会において、五行説が風水説と結びつき、遷都という社会・政治問題を論じる言説として機能していたことがうかがえる。都城の山形に五行を適用させた彼の主張は、次のようなものであった。

「五徳とは、中央の面嶽が円形をなし、これは土徳を象徴します。また北の紺嶽は曲形をなし、水徳を象徴しています。南の冠嶽は尖鋭で火徳を象徴し、東は楊州の南行山が直形で木徳を、西は樹州の北嶽が方形で金徳を象徴しています」¹⁵⁾

五行説は風水説と結びつき、自然景観の解釈に利用された。風水理論における山地景観解釈法のひとつに、五行原理にもとづき、山の氣勢・形態を5類型で説明したものがある。これによると、水山（あるいは水星）とは、水のようにやわらかな稜線がうねりながら下っていく丘陵地を指す（図3）。中国伝来の五行や風水の原理とその要素は、韓国の伝統集落景観に複合的に投影され、その結果、新たな文化生態景観が形成された。例えば、集落から周囲を眺める際、風水における火山（花こう岩地質が隆起し、風化・侵食された山の稜線が火花のような形をなす山）があると（図3）、集落では火山から吹き出る「火気」を防ぐため、池を造成して水景観を変化させた（図4）。このような対処法は、五行論における相生・相剋の原理の

13) 『高麗史節要』 卷26・恭愍王

14) 金謂碑の建言を受け、肅宗は1099年、南京に親臨してその地勢を調べ、1101年には宮殿の着工を命じ、1104年に完工した。

15) 『高麗史』 卷122・列伝35・方技金謂碑「五徳者、中有面嶽、為円形土徳也。北有紺嶽、為曲形水徳也。南有冠嶽、尖鋭火徳也。東有楊州南行山、直形木徳也。西有樹州北嶽、方形金徳也。」



図3 火山と池の関係にみられる集落の五行的景観構成と文化生態

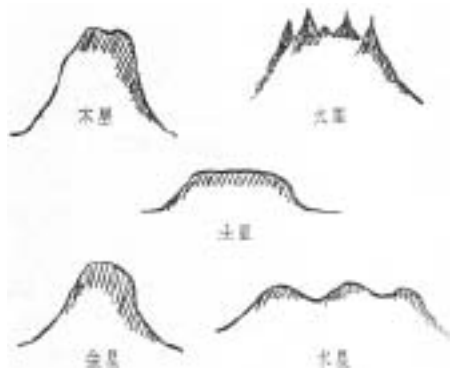


図4 五行論によって分類された5つの風水的山形

「水剋火」が適用され、景観化されたものである。

五行思想とその原理は、中国から受容されたものであるが、韓国や日本の民間においては、それを独特かつ多様に適用、実践している。韓国の民間においては、民俗信仰や象徴、あるいはそれにもとづいた造形物を活用したり、裨補的地名をつけたりすることで、象徴的・心理的な相剋効果を強化する例が見られる。こうした特徴は、五行の相剋原理が背景にある。具体例として、前述した「火山」から発せられる火気を制するため、水神を象徴する亀やスッポンの造形物を、火山と向き合わせたり、ソッテ（村の入り口などに立てられた長竿）の上に真鴨（韓国語では「水鴨」という）を置いて火山と向き合わせたり、塩壺や海水を山の峰に埋めたり、といった行為がある。地名としては水に関係した名をつける例が存在する。日本においても、防火、洪水、風に対する防災呪術として、五行相剋論が応用された民俗信仰が多く存在する。一例として、千葉県泥祭は洪水を制する治水呪術であり、五行における「土剋水」の原理によって水を制する構造が内在しているという¹⁶⁾。

16) 吉野裕子『陰陽五行と日本の民俗』（人文書院、1983年）137-142頁

三 風水における「得水」

中国で形成され、韓国や日本に伝播した風水思想は、温帯季節風帯における気候環境への適応、農耕を中心とする生産関係と農業生産力、そして定住生活文化の様式という背景・条件から成立した伝統的文化生態学であり、環境思想であった。新羅時代を前後して中国から入ってきた風水は、韓国の伝統的水景観の知識・象徴体系に最も大きな影響を与えている。それは水景観における立地傾向・方法においてだけでなく、文化生態的知識体系の形成と変容にも及んでいる。伝統時代の韓国人は、中国の風水思想を韓国の気候や地形環境、文化的な条件に合わせ、主体的に活用した。

温帯季節風帯の気候条件に支配される住居環境や農耕様式において、水資源の確保・管理が可能な立地と環境の整備は、生活の営為における核心的要素であり、それは得水を最優先とする風水の最適立地論と、水景観の裨補という環境管理論を生み出した¹⁷⁾。風水における最適の立地を意味する「明堂（あるいは明穴）」とは、永続性をもった環境条件を満たす景観モデルであり、「裨補」とは、文化生態を補完することで環境を管理する手段であった。

人類の生活史は、水を確保・管理し、利用する歴史であったといっても過言ではない。生命の生成と維持、存続とは、水なくしては考えられず、水は生命の根源に最も近い物質・要素として認知されていた。また農耕という生活様式を中心とする東アジアの伝統社会において、水の豊富な供給は不可欠であった。降水量のおよそ3分の2が夏に集中し、国土面積の約3分の2が傾斜地である韓半島は、豊かな土壌水分を維持するのが困難であった¹⁸⁾。こうした韓半島の気候・地形的条件は、伝統時代における水資源の活用・管理を目的とする風水的知識体系の形成と、その社会的実践の原

17) 『錦囊経』「風水之法、得水為上、藏風次之」

18) 李道元「水資源利用観点からみた韓国風水」(『Pungsu : Korean Geomancy in Cultural Ecology』、英文版風水単行本ワークショップ資料集、2009年) 2頁

動力になった。

このような韓国の気候・地形条件を反映しているかのごとく、韓国における風水は、本格的に運用が始まった高麗時代以降、水害防止など実用的なものとして利用された。『高麗史』には、文宗7年（1053）8月に都邑の虚欠部分を補うため、堤防の築造を計画した。その内容は次のとおりである。

羅城の東南端にある高い丘は、都邑の虚欠地勢を裨補するものである。

このたびの大雨で河川が氾濫し、土が流されてしまったため、役夫3～4000人を徴発し、堤防を修築せよ¹⁹⁾。

風水の原理からみると、水は風水の知識体系を構成する二大要素のひとつであり、同時に最も重要な要素である。風水とは「藏風得水」の略語である。風水経典のテキストとされる『錦囊経』において「風水の法は得水を上となし、藏風はこれに次ぐ（風水之法、得水為上、藏風次之）」とあるように、「得水」は風水の原理と実践における最上位、最優先の要素であった。こうした風水の「得水」と水景観との結びつきは、伝統時代における韓国の集落や建築物の立地に大きな影響を与え、文化生態に対する認識や実践に結びついていった。その結果、集落や伝統建築の立地景観において、可視的な水景観のパターンと秩序が形成された。集落に対する河川の位置には、帯水・面水（横を通り過ぎるもの、向かい合ったもの）、環抱水（周囲を取り巻くように流れるもの）（図5）、合水（2つの流れがひとつに合わさるもの）などが存在する。朝鮮時代における地方行政の中心地（邑治）の地形・景観も、得水にもとづいた景観パターンが見られる（図6）。一例として、永川の古地図の左下にある「二水合襟」の語は、風水的立地の得水（特に合水）を風水的に表現したものである（図7）。

風水の得水とは、住居の立地条件における理想的かつ最重要の原理であ

19) 『高麗史』「七年八月丁酉。御史台上言、准尚書工部、奉制羅城東南隅高岸者、所以補都邑之虚欠、今為川潦襄壞、宜徵役夫三四千人修防、当司勘会、其岸傍辺、皆是田疇、恐損禾稼、請待收穫。從之。」



図5 朝鮮時代における邑集落の風水的立地の得水と背山臨水モデル



図6 地図の左下に「二水合襟」の語が見える（1872年 地方地図慶尚道永川郡）



図7 河回村の環抱水

り、韓国の伝統集落においては、長きにわたる風水思想の影響から、(背山) 臨水という典型的な立地モデルが形成された。韓国村落研究の初期の著述である善生永助の『朝鮮の集落』にもあるように、朝鮮においては、歴史の古い同族村は、風水思想の影響から背山臨流の位置をもつものが多い²⁰⁾。さらに伝統集落の配置や建築物の向きも、河川の方向に合わせて決められ、池などが「火山」に対応して造成され、行舟形（水に浮かぶ舟の形状、周囲を水に囲まれた集落の意）をなす地には、井戸を掘ることをタブーとする慣習なども登場した。風水的な自然と人間の関係は、従来の自然信仰的实践形態とは異なる、新たな相互作用の関係が確立していき、それらは集落の景観に反映し、具現したのである。

伝統集落において水景観を造営する際、よく用いられた方法が「得水裨補」である。得水裨補とは、風水の理想的な立地景観において、得水の条件が備わっていない場合、これを人為的に補完することをいう。風水論において理想的な得水の条件は「水回」や「水曲」であり、あるいは「前水の法は屈折のたびに一度とどまり、そして出て行かなければならない」²¹⁾という。反対に、「水流」や「水直」は凶であり²²⁾、その修正・補完策として行われるのが裨補である。集落をただ通り過ぎる河川を、居住区域の周囲を取り巻くように人為的に造成、変化させたもの、居住区の入口に池を造成して流れを一時的にとどめたもの（図8、9）、まっすぐに通り抜ける川の前に林を造成して迂回させたもの、などの例が一般的である。慶尚北道の大邱では、基地（集落）と主山（背後の山）の間を流れる川の流れを変え、基地の周囲をめぐるよう造成している（図10）。

20) 善生永助『朝鮮の集落』後篇（朝鮮総督府、1935年）46. 994頁

21) 『錦囊経』奎章閣本（図書番号 1741）

22) 『青烏経』「山来水回、逼貴豊財、山囚水流、虜王滅侯、山頓水曲、子孫千億、山走水直、従人寄食。」



図8 靈山邑と硯池の景観



図9 靈山邑の人工池
（『海東地圖』、慶尚道靈山）

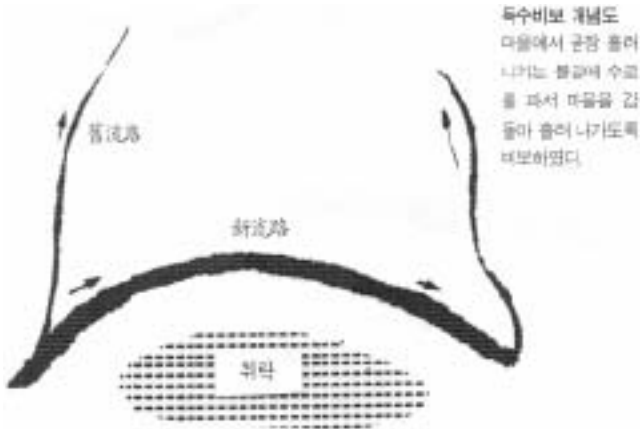


図10 得水裨補

四 儒学における水

儒学思想は、朝鮮時代社会のイデオロギー的側面を支配した。儒学の自然観は、自然環境との関係における媒介として機能し、文化景観の形成に影響を与えた。朝鮮時代における性理学の実践態度は、中国よりもはるかに原理的で正統性を重んじたものであった。性理学的な山水観は、従来とは質的に異なる象徴・知識体系として展開していった。朝鮮時代中期の道

学者（性理学者）は、道徳的な隠喩・解釈でもって山水景観に接したが、彼らが水景観に与えた象徴的価値は、書院の「親水的立地」に大きな影響を与えた。その後、朝鮮時代後期に登場した実学思想は、河川の水景観に対する体系的知識情報を構築し、中華的な河川認識から脱却し、朝鮮の河川体系を主体的に確立しようとする努力が見られるようになった。

儒教思想には、自然風土との順応を目指す環境思想が、本来的に内在していた。『中庸』には「上は天時により、下は水土による」²³⁾とあるが、この水土とは風土のことで、今日的环境や自然に該当する言葉である。「水土に従う」とは、地理的な自然環境の秩序に順応・適応する儒教の自然観を端的にあらわした言葉と解される。

儒教における水景観は、絶えず自己を刷新し、その根本を省察する行為を意味するものであった。孔子は、川で水をながめながら「流れるとはこのようなものであるのだな。昼夜を休むことがない」²⁴⁾とし、さらに「仁者は山を好み、賢者は水を好む」²⁵⁾と、山水を人間の道徳や性情と結びつけている。また孟子は、孔子が水から何を悟ったかという弟子の質問に対し「泉が休むことなく湧きあがり、やがて海に至るように、根本を備え、誠実に精進する姿」だと語っている²⁶⁾。

儒教は三国時代に伝来し、高麗時代の政治・社会制度に大きな影響を与えたが、文化生態的象徴や知識体系としての役割は、朝鮮時代中期に入り、性理学的な自然観が社会支配層や知識人階層に広がって以降である。性理学者が、儒学者の山水認識に投影されると、彼らは山水を「観物察己」する景観テキストとして認識するようになった。彼らは山水に対する道学的認識にもとづき、自我の確立と人格の修養のため、自然環境を積極的に活用

23) 『中庸』三十章「仲尼、祖述堯舜、憲章文武、上律天時、下襲水土。」

24) 『論語』九章「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍昼夜。」

25) 『論語』二十一章「仁者乐山、知者樂水。」

26) 『孟子』離婁章「徐子曰、仲尼亟称於水曰、水哉水哉、何取於水也。孟子曰、原泉混混、不舍昼夜 盈科而後、進放乎四海、有本者如是是之取爾、苟為無本、七八月之間、雨集溝澮皆盈、其涸也可立而待也、故声聞過情、君者恥之。」

した²⁷⁾。ここにおいて山水は、天の理を体現し形状化した存在として窮理されるに至り、儒学者は山水から仁と智を会得することを目指した。朝鮮時代中期において慶尚右道を代表する儒学者、曹植（号は南冥）が、儒学における水の意味と象徴を詠じた「原泉賦」²⁸⁾や、智異山の矢川のほとりに居を構えて詠じた「徳山卜居」²⁹⁾には、朝鮮時代における儒学者の水認識・価値観がよくあらわれている。

地中に水があるのは	惟地中之有水
天一が北に生じるためである	由天一之生北
天の根本とは限りのないものであり	本於天者無窮
それによって休むことなく流れるのである	是以行之不息

孔子が水を称えたことを思えば	思亟称於宣尼
これを根本の意に解した孟子の心は、信じるに足る	信子輿之心迪

—————（下略）

春の山には、かぐわしい草などどこにもないが	春山底処無芳草
ただ、天にも届きそうな天王峯はすばらしい	只愛天王近帝居
手ぶらで帰ったら、何を食べればよいのだろう	白手帰来何物食
十里先まで延びた銀河の水は、いくら飲んでも飲みきれない	
	銀河十里喫有余

水に対する儒学的価値の附与と道徳的態度は、朝鮮時代の私立教育や祭享施設であった書院の場所や立地の選定にも影響を与えた。書院は1543年の白雲洞書院を皮切りに、朝鮮時代中期に入り、士林（儒者勢力）によって集中して設立された。書院を建てるにあたっては、山水の美しい場所、特に河川に近接し、眺めることのできる場所が選ばれた（図11）。

27) 李相弼『南冥学派の形成と展開』（ワウ出版社、2005年）24頁
 28) 慶尚大学校南冥学研究所編訳『南冥集』（理論と実践、1995年）109頁
 29) 『南冥集』巻1・第15章



図11 紹修書院の親水立地



図12 智異山圈の寺院分布と立地



図13 智異山圈の書院分布と立地の親水性

こうした事実を反映するかのようには、英江書院、沂川書院、道溪書院など、書院の名に江、川、溪、湖、河、泉といった水景観の用語が含まれた例は230以上にもものほり、これは朝鮮時代に建てられた書院の過半数を占める。書院の親水的立地指向は、その近隣に存在する寺院の立地とは対照的で、明確に区別される（図12、13）。

朝鮮時代後期に入ると、儒学的水景観にも発展的变化が起こった。この時期の社会・経済的発展を受け、儒学は「実事求是」（物事を実証的に追求すること）としての経世学問へと変化していったが、山水認識や態度においても、利用厚生としての水景観と知識体系への変化が見られるようになる。特に18世紀以降の商工業の発達と流通経済の拡大、地域間の交流増大といった社会経済の発展を背景に、河川を体系的に理解しようとする努力は、河川誌として結実した³⁰⁾。

朝鮮時代後期において地理学を確立し、山水を体系づけた実学者、申景濬（1712-1781）の『山水考』の冒頭には、河川の内容が次のように記されている。

一つの根本が万に分かれたものが山であり、万に分かれたものが一つに合わさったものが水である。国の山水は、十二に表される。白頭山から分かれて十二の山となり、これがさらに分かれて八幹（八路）の山々となる。八つの幹（八路）の水が合わさって十二水となり、十二水は合わさって海となる。（水が）流れて（山が）そびえ立つ形勢と、（山が）分かれて（水が）集まる妙理は、ここにある …、十二水とは、漢江、礼成江、大津、錦江、沙湖、蟾江、洛東江、龍興江、豆満江大同江、清川江、鴨緑江をいう。山は三角山を首とし、水は漢江を首とするのは、漢城（ソウル）を尊んだものである³¹⁾。

30) 楊普景「丁若鏞の地理認識」（『精神文化研究』20-2、1997年）114-116頁

31) 『旅菴全書』卷之十・山水考一「一本而分万殊者山也、万殊而合一者水也、域内之山水、表以十二、自白頭山分而為十二山、十二山分而為八路諸山、八路諸水合而為十二水、十二水合而為海 流峙之形、分合之妙、於茲可見…。十二水、一曰漢江、

申景濬の『山水考』以降、水系を中心とする地理的認識が発展・深化し、水系にかかわる自然地理・歴史・軍事・政治・地域などの情報が加わり、河川の知識体系と地域文化を集大成した丁若鏞（1762-1836）の『大東水経』（1814）が誕生する。同書は、中国で3世紀ごろの桑欽が著した『水経』と酈道元（467-527）の『水経注』をモデルにしているが、朝鮮後期社会の主体的な空間認識にもとづき、朝鮮の特殊性を反映した河川体系の確立を試みたものとして評価される。『大東水経』の重要性と意義は、河川を中心とする朝鮮時代唯一の独立地理書という点にある。丁若鏞は、生活基盤の中心が河川にあることを看破し、これを中心に国土の空間を把握したのである。同書は、中国とは異なる朝鮮の河川体系を強調するため、河や江の名を「水」に改めるなど、朝鮮の河川における独自体系や、朝鮮中心の空間認識の確立を試みている³²⁾。

おわりに

韓国の伝統的な水景観に対し、その文化生態的な象徴と知識体系、史的变化を考察することは、当時の人々の水認識と態度、人と水との相互関係とその史的变化に対する再認識であり、韓国人が伝統的に水資源をいかに利用し、管理してきたのかを検討した点で意義がある。以下、韓国における水景観の伝統的象徴と知識体系を4点に要約し、結びにかえたい。

第一に、水景観の形式である。水景観の象徴・知識体系の淵源には、古代の巫教や自然信仰につながる山川崇拜観念があった。やがて韓・中間の交流が盛んになり、中国伝来の山川に対する国家祭儀、水神・龍信仰、風水における得水、五行の水思想、儒学思想における山川観念などが人々の自然観に影響を及ぼし、文化生態的な水景観の確立を促進し、従来の水景

二曰礼成、三曰大津、四曰錦江、五曰沙湖、六曰蟾江、七曰洛東、八曰龍興、九曰豆滿、十曰大同、十一曰清川、十二曰鴨綠。山以三角為首 水以漢江為首、尊京都也。」
32) 楊普景（前出書、1997年）114-116頁

観の文化生態的な象徴や知識体系の変容を誘発した。特に風水は、伝統的水景観の知識・象徴体系に最も強い影響を及ぼした。

第二に、概念の変容と発展である。通時的にみて、韓国水景観の象徴と知識体系は、中国のそれと交渉の過程をたどりつつ、概念の豊かさや深みが増し、形式が多様化し、内容もより実質的なものへと変化した。形式においては、固有の水景観における信仰や神話が、龍信仰、国家の山川祭儀、建国神話へと、多彩に展開した。内容と意味においては、中国伝来の五行論にもとづき、水概念の拡大と原理的思惟が深化し、相互作用しつつ知識体系を発展させていった。また風水は、水景観への立地パターン・方法に多大な影響を与え、さらに「背山臨水」という集落の典型的な立地景観を形成し、従来 of 文化生態における知識体系にも大きな変容をもたらした。朝鮮時代に入り、性理学が儒学者の自然観に投影されると、儒学者の水景観は「観物察己」を目的とする景観テキストになった。

第三に、韓国的な特色である。伝統時代において、韓国人は中国の水景観の象徴と知識体系を、韓国の自然風土や社会・文化に合わせて主体的に受容し、複合的に運用した。自然信仰・神話における特徴としては、水神（水姑）があり、村落における祭儀としての井祭があった。龍信仰は山岳信仰や風水と結合し、山と龍が一体（龍山）となって景観化した。国家の山川祭儀の対象には「三」という数字が象徴的に登場する。一方、飛鳥時代の藤原京においても、王京の背後と左右に「三山」的な配置が見られる。古代韓国と日本の三山の観念については、今後研究が必要だと考えられる。五行思想と原理の適用や実践は、民間において独特かつ多様に展開した。風水は韓半島の気候や地形環境、集落の立地条件に合わせて適用された。朝鮮時代中期における性理学的自然観は、書院における「親水立地」の背景思想として定着し、朝鮮時代後期の実学は、中国という空間認識から脱却し、朝鮮中心の水景観認識として河川体系を確立せんとする努力がうかがえる。

最後に、韓国の伝統的水景観の知識と象徴体系の特徴として、山との関

係からみた水観念とその背景についてまとめておきたい。韓国において、水とは常に山と対応しつつ、山水や山川、山河といった用語で一般化されてきた。このような山と水の相関的認識は、山あれば水が流れ、水あれば山があるという、韓国の地形環境にもとづいている。龍山系の山々が、主に河川のそばに分布しているのも、こうした文脈から理解されよう。

ところで興味深いのは、韓国の伝統的な象徴体系において、水は山よりも暮らしに欠かせない要素であるにもかかわらず、山が持つ神聖性・信仰性に比べてその位階が低かった点である。その例証として、国家的な山川祭儀において、三山・五嶽といった山の祭儀は「大祀」であったが、海や川の祭儀は「中祀」であったこと、村の主山は鎮山（風水観念における村を鎮護する山）に位置づけられたが、このような位置づけが河川には特になかったこと、村の信仰儀礼の中で、主山をまつる山神祭は、井戸をまつる井祭よりも位階が高かったこと、などがあげられる。また本稿で触れたように、水神である龍の信仰が龍山となって景観化、認識された点も、こうした認識が反映したものと解釈できよう。このように、山水の象徴と信仰体系において、山が水よりも高位であり重視された理由とは何だったのだろうか。

その背景には、基本的に韓半島の地形、気候風土が内在している。一例として、中国の華北・中原地域のような降水量が少なく水が不足しがちな黄土高原地帯においては水が重視され、その象徴として水神観念が相対的に発達し、風水理論においては得水が最も強調された。だがこうした中原地域に対し、韓国は降水量が少なくなく、大部分の伝統集落は、水源の確保が容易な立地であったため、水の問題が中原ほど切実ではなかった。山は都の地の軍事的防御に重要な役割を果たし、実用面においては住民に山林資源を提供する一方、水は山に端を発し、山に付随するものと認識されていた。山岳崇拜の観念が受け継がれてきたことも、山岳信仰を重視する伝統を生み出すのに一助した。このように、山の位階を優位に位置づける伝統的な意識背景には、山が天に至る通路、もしくは天に最も近い景観だ

とする、「天」中心の象徴観念がある。韓国の古代神話において、天神の息子である檀君は山神と化すなど「天神⇒山神」もしくは「天神＝山神」という連続性や転化が認められる。だが一方では、海辺に立地する村において水神あるいは海神信仰が強く見られる。これは海が及ぼす自然の影響力が、住民の意識と信仰に反映し、表現されたものと理解されよう。このように伝統時代においては、自然が人に及ぼす威力が、人々の象徴や信仰を左右していた事実が理解できる。

以上のように、伝統時代における水景観の文化生態的象徴と知識体系は、水資源の価値や比重が反映しつつ、歴史的に形成、展開してきた。それらは、水資源の確保と保全、活用、そして治水と管理に貢献したものとして評価できよう。

参考文献

- 善生永助『朝鮮の集落』後篇（朝鮮総督府，1935年）
吉野裕子『陰陽五行と日本の民俗』（人文書院，1983年）
金泰坤『韓国の巫俗神話』（集文堂，1985年），『韓国の巫俗神話』，集文堂
慶尚大学校南冥学研究所編訳『南冥集』（理論と実践，1995年），『南冥集』，경상대학교
남명학 연구소 편역，이론과 실천
楊普景「丁若鏞の地理認識」（『精神文化研究』20-2，1997年），“丁若鏞의 지리인식”，
『정신문화연구』20（2）
永留久恵「東アジアの龍神信仰について」（『東北アジア文化学会国際学術大会発表資料集』，2001年），“東アジアの龍神信仰について”，동북아시아문화학회 국제학술대회 발표자료집
李相弼『南冥学派の形成と展開』（ワウ出版社，2005年），『남명학파의 형성과 전개』，와우출판사
田英淑「韓国と中国の創世および建国神話の中に宿る水崇拜観念」（『韓中人文科学研究』24，2008年），“한국과 중국의 창세 및 건국신화 속에 깃든 물 숭배 관념”，韓中人文科學研究，24
李道元「水資源利用観点からみた韓国風水」（『Pungsu: Korean Geomancy in Cultural Ecology』，英文版風水単行本ワークショップ資料集，2009年），“수자원 이용 관점에서 살펴본 우리나라 풍수” Pungsu: Korean Geomancy in Cultural Ecology，영문판 풍수단행본 워크샵 자료집
尹弘基「行舟形風水局面の文化生態に対する試論」（『Pungsu: Korean Geomancy in Cultural Ecology』，英文版風水単行本ワークショップ資料集，2009年），2009，“行舟形 풍수형국의 문화생태에 대한 시론”，Pungsu: Korean Geomancy in Cultural

Ecology, 영문판 풍수단행본 워크샵 자료집